

『ポウル・ドンビー』(ヂッケンス) (一)

|| 英文學に現はれたる子供 (二十) ||

岡田 みつ

フロレンスとポウルは、ビブチンさんの學校へ來た。一所に附いて來た伯母達が今歸つて行つたばかりで、ビブチンさんは、火を後に<sup>うしろ</sup>にして、新來の二人を古參兵見たやうに檢閲してゐる所であつた。ビブチンさんの姪で、もうよい年輩の、氣の良ささうな婦人が、ビザストンといふ幼い生徒の他所行きの襟<sup>カマ</sup>を外してゐると、パンキーといふ小女は(之も生徒だがもう此他にはないので)御客の前でべそをかいた罰で、裏の明き部屋へ遣られるところであつた。ビブチンさんはポウルに對つて、「坊ちゃん、私を御好きになりさうですか。」と尋ねた。

「ちつとも好きさうでない。僕は歸りたい。此處

は僕の自宅<sup>うち</sup>でないから。」とポウルは答へた。

「さう。私の宅<sup>うち</sup>ですからね。」とビブチンさんは言ひ返した。

「いやな家<sup>うち</sup>だ」とポウルがいふと、

「もつといやな處がありますよ。不良<sup>いけない</sup>な子供を押込める處は。」とビブチンさんが言つた。

「あの子は、押込められた事がありますか。」とポウルはビザストンといふ子に指をさして問ふた。

ビブチンさんがさうだと答へたので、ポウルは其日一日中、ビザストンの頭<sup>かぶ</sup>の先から足の先までを眺め、その顔の種々の表情に目を付けて、不思議な長ろしい經驗のある子だと思つて居た。

午後一時に晝食で、それが大方<sup>なまじり</sup>腥氣<sup>きんき</sup>なしなのであ

つた。パンキーは、押込めの處から連れ出されて来て、御客の前で、べそをかく子は、天國に行かれないなど、言はれてゐた。嗚々／＼とさん／＼言ひ聞かされた揚句に、やうやく一皿詰らぬ食物を貰つて、それに對してビブチンさんに感謝する句の入つた、此學校特獨の祈禱（グレイス）を唱へた。ビブチンさんの姪ベリーは、冷肉を食べ、ビブチンさん自身は、體質上暖い食物が必要だとかで、蒸氣（ヒート）の出てる、好い匂ひのする、出來たての羊肉で、御晝を食べた。

晝食後、雨が降り出して濱へ出られないし、ビブチンさんは、食事のあとは休息しなければ身體に障るとの事なので、子供達は、ベリーと押込めの部屋へいつた。此處は、大勢で入つて見れば、一向いやな所ではなかつた。ベリーが一所になつて跳ねまはつて、面白く遊んでやるので、子供達は喜んだのだが、ビブチンさんが怒つて隣室から壁をドン／＼叩いたので、遊も御止めになつてこ

んどはベリーが小聲で御伽話を日の暮まで聞かせてゐた。

夕食にはパンにバターに薄い牛乳が澤山あつた。

ビブチンさんとベリーには御茶が入つて、殊にビブチンさんには、焼パンの暖い／＼のが數知れずあつた。ビブチンさんは、之を食べて随分脂肪っぽくなつたやうだが、心の中までは滑／＼にならぬと見え、やつぱり恐い顔をして、その無慈悲な眼に少しの優（やさ）し味も出なかつた。

夕食後に、ベリーは小さな針箱を持ち出して、精を出して縫ものをした。ビブチンさんは、眼鏡を掛けて、大きな本を擴げて、居眠を始めた。而して火の方へ倒（のめ）りさうになる度に、ハツと目を覺して、ビザストンが居眠をするツて、その鼻を指で弾いてゐた。

やつとの事で、子供等の就床の時刻が来て、皆臥床（ベット）に入つた。パンキーは暗闇に一人寝るのを恐がるので、ビブチンさんは、必らずその子を羊見

たやうに追ひ立て／＼二階へ連れて行くので、而してパンキーは自分の室へいつても長い間泣いてゐるので、ビブチンは時々二階へ叱りに上つて行くのであつた。九時頃にもなると、ビブチンさんは一寸間食をしないと宜く眠られぬとかで、又よい句が一時家中に漂ふたが、間もなく家内一統寢静まつてしまつた。

ビブチンさんの學校は、ざつとこんな様子であつた。土曜日には、ドンビー君がこの地へ來るので、フローレンスとボウルは父の旅館へいつて一所に夕食をたべ、日曜日も父と共に暮し、晝食の後は大抵馬車で運動に出かけた。さて日曜の晩が一週の中で一番面白くない晩で、ビブチンさんは特に怒りッぽいと極まつて居た。パンキーは遊びにいつた伯母の宅から、嫌々連れ戻されて不機嫌だし、ビザストーンは、親戚が皆印度に居て遊びに行きどころがないから、日曜の禮拜式の間中、大人しく手も足も動かさずに居なければならぬの

が辛くて／＼、或る日曜の晩、密かにフローレンスに對つて、印度へはどう行くか知つて居るかと尋ねた位であつた。

ボウルは、火の傍の小さな腰掛椅子に坐つて、ビブチンさんをいつまでも／＼熟と見入つて居るのが常であつた。此子は、ビブチンさんを見て居る時には飽きるといふ事を知らぬ氣に見えた。ビブチンさんを好きな譯ではないが、一向長くないので、而して例の此子の氣分で、この老婦人に對して異様の興味をもつて居た。ボウルは、坐つては此老婦人を眺め、手を暖めては眺めするので、流石年功のビブチンさんも時にはどぎまぎさせられた。

或晩、唯二人限りの時、ビブチンはボウルに向つて何を考へてゐるのだと尋ねた。

「あなたの事を。」とボウルは遠慮なく答へた。

「私の事で何を考へてゐるの。」とビブチンさんが問ふた。

「驚巖位かと思つて。」とボウルがいふ。

「そんな事を口にするものではありません。それはいけない。」と老婦人は答へた。

「何故。」とボウルが問ふた。

「失禮だから。」とビブチンさんは噛み付くやうに答へた。

「失禮なの？」とボウルがいつた。

「えい。」

「暖い羊肉だの、焼パンだのを皆食べてしまふのは失禮だつて乳母がいひましたよ。」とボウルが無邪氣にいつた。

「あなたの乳母は性悪の出過ぎもの、圖太い御轉婆女だ。」とビブチンさんは顔を赤めながら云つた。

「それは何の事？」とボウルが尋ねた。

「何でもよろしい。そら、御話にあつたでせう。

物をきゝたがつた子供が、氣違ひ牛に角で突き殺されましたね。」としつべ返しをした。

「だつて、その牛が氣違ひなら、どうして子供がいんな事を訊きたがるつていふのが解るんです。氣狂ひ牛の傍へいつて、内所で知らせてやる事なんて出来ませんもの。あんな話はうそだ。」

「うそだつていふの。」とビブチンさんは、呆れて言つた。

「えい。」とボウルが答へた。

「もし、その牛が普通の牛だつたとしても、うそだつていふの、疑ぐり人さん。」とビブチンさんが言つた。

ボウルは、その方面は一向考へに入れず、唯牛が發狂してゐるといふのを土臺に置いて結論をつけたのだから、此際はまづ自分が負けたと思つて黙つてしまつた。併し、やがてビブチンさんを降參させるつもりで、頻りに黙想してゐるので、ビブチンさんも、ボウルが之を忘れてしまふまでは逃げるが上策と退いてしまつた。

この時からビブチンさんもボウルに對して同様

の妙な興味を覚えて、それから二人向き合つて居ないで、ポウルの椅子を自分のに並べて置いてやるやうにした。すると、ポウルはビブチンさんと爐火の間に坐を占めて、その小さな顔に火の光をまともに受けながら、ビブチンさんの黒い着物を見、その皺を一本／＼に研究し、その無慈悲の眼を覗き見るので、ビブチンさんも折々は交睫を振りをして、目を塞いでしまふ事もあつた。御まけに、飼つてある一疋の黒猫が、火の前に蹲つて喉を鳴しながら、火に向つて目をしばだゝいてゐるのであるから、丁度ビブチンさんが魔法使の女で、ポウルと黒猫とがその役神にも見立てられた。

ポウルは、豫定の期が來ても格別丈夫にもならないので(但し顔色はよくなつたが)小さな車を一輛作つてもらつて其中に横臥して、いろはの本や何かを一所に載せて、濱へ曳いていつてもらつた。風變りの嗜好のある子の事で、車曳にと聲はれた赤ら顔の男の子を嫌つて、その子の祖父で、凋び

た澁面のへな／＼の着物を着て居る老爺を雇つたこの奇妙な男が車を曳いて、フロールレンスがいつも傍に歩いて、乳母が後からついて、ポウルは毎日海邊へ出かけていつた。而して、何時間でも、車の中に、坐つたり横になつたりしてゐた。フロールレンスはいつとも／＼離れつこなしたが、ポウルは他の子供が傍へ來るのが何よりも嫌ひであつた。遊び相手になりに子供が來ると、

「どうか彼方へいつて御くれ。ありがたう。僕は御前に用はない。」といつた。又小さな子が小聲で如何ですかなど、見舞をいふと、

「ありがたう、丈夫です、御前あつちへ行つて遊んだ方がいゝでせう。」と答へた。

而してその子供の立ち去るのを見送つて、フロールレンスに向つて、

「ね、姉さん他の子供なんかいりませんね」といつた。此のやうな時には、ポウルは、乳母の居るのも厭はしいらしく、乳母が貝を拾ひにだか、話

相手を探しにだかぶら／＼歩き去ると大喜びをするのであつた。ポウルの大好きの場所は、大抵の遊び人のない淋しい處であつた。風がそよ／＼吹いて、波が車の輪の中までざぶり／＼来るその場所、フロウレンスが手細工をしながら傍にゐてくれるか、本をよんでくれるか、其とも二人で話でもして居れば、ポウルには此上の望みはないのであつた。或日ポウルは、

「姉さん。印度ツてどこぞら、あのビザストンの親戚みよりのあるところは」といつた。

「遠い／＼處よ。」とフロウレンスは、仕事から目をして上げて答へた。

「何週も掛かるの。」

「え、何週も／＼夜も晝もかゝつて行くの。」

「姉さんが印度に居れば僕はえ……母さんがなすつた事何でしたッけ。言葉を忘れた。」

「私を可愛がつて下すつたッていふ事？」とフロウレンスが訊いた。

「いゝえ。そうではない。僕だつて姉さんを可愛いがるでせう。何でしたッけ！あゝ、死ぬッていふ事！もし姉さんが印度に居れば、僕は死んでしまひますよ。」

フロウレンスは、急いで仕事を小傍に置いて、ポウルの枕近く顔を差し寄せて、撫て慈んだ。而して自分も弟がそんな遠い所に居れば死んでしまふと言つた末、

「でもポウルさん、今に丈夫になるわね。」といつた。

「え、僕は餘程よくなつたのですよ。死ぬッて僕のいふのは、その事ではないの。淋しくて悲しくて死ぬッていふ事なの。」

又或時その淋しい處で、ポウルは眠つてしまつて、長い間、大人しく寝て居たが、急に目を覺して、聞き耳を立て、はッと驚いては、また耳を澄すまして聞いてゐた。

「何が聞こえると思ふの。」とフロウレンスが尋ね

た。

「何て言つて居るのだから知りたい。」とフロレンスの顔を熟と見て「海がですよ、何を始終くあのやうに言ひ續けて居るのでせう。」

「たい波の音なのよ」とフロレンスが教へた。

「え、え、でも波が始終何か言つて居る。始終同じ事を……あの向ふは何處？」とポウルは起き上つて、水平線の處をじつと見詰めた。

「他處の國があるの。」

とフロレンスが言つても、その意味ではない、もつとく彼方の事を訊くのだ、と、ポウルは言つた。

其後は、屢々二人の話の最中にも、ポウルは波が何をいつてゐるのだらうと思つては、話を途切らせて、伸び上つては、遠い／＼、目に見えぬあなたを見てゐた。(續)

## 注意すべき子供の胃腸病

醫學士 石 塚 保 吉

### △子供の胃腸の病氣は最恐ろしい

夏は胃腸の病氣が多い。大人も子供も胃腸をこわすのが多くて。しかもなか／＼重いのがあつて、之れが爲めに斃れる人も少くない。一般に世間の人々は、胃腸病の恐るべき事、殊に小兒のそれの甚だ

恐るべきものである事をよく了解して居ないやうです。が小兒の病氣中、胃腸の病氣は最も恐ろしいものであります。なせ恐ろしいかと云へば、此病氣が一番死亡率が高いからである。十中の七八と云ふ高度を示して居ります。世間の人が、なせ此恐ろしい病氣を恐ろしいと思はないかと云ふと、大